

樹木は、この溢れんばかりの過剰を
Was er von seiner verschwenderischen Fülle

使うことも、享受することもなく自然に還すが
ungebraucht und ungenossen dem Elementarreich zurückgibt,

動物はこの溢れる養分を、自由で
das darf das Lebendige in fröhlicher

嬉々としたみずからの運動に使用する。
Bewegung verschwelgen. So gibt uns die Natur

フリードリヒ・フォン・シラー Friedrich von Schiller

*デンマーク王子アウグステンブルク公にあてた美学的なことに関する書簡第27号より一部を抜粋

横浜のみなとみらい駅で降りて、長いエスカレータを昇って行くと、磨かれた黒い大きな壁二面に、端正な碑文が刻まれている。行き先を急ぐ人々はほとんど関心を示す様子はないが、そこにはドイツ語の詩文とその日本語訳が書かれている。(上記)

壁面は、米国の現代アート作家ジョセフ・コッススの作品であり、引用されている詩文は、一八世紀のドイツの作家フリードリッヒ・フォン・シラーの言葉である。あらためて読んで、わたしははっとさせられた。過剰とは、樹木が、太陽の恵みを取り込み、そのエネルギーを使って、根をはり、枝や葉を茂らせ、幹に年輪を刻み、木の実をみのらせることを指している。そして、その成果物を惜しげもなく、鳥や昆虫たちに分け与えてくれることを指している。

それだけではない。地表におちた無数の落ち葉は、土の中のミミズ、線虫、その他の微生物の重要な糧となつて、土壌を育んでくれている。もし樹木が、利己的に振る舞って、自分の生存に必要な最低限の光合成しか行わなかったら、われら地球の生命に今のような多様性は生まれ

得なかった。一次生産者としての樹木が、太陽のエネルギーを過剰なまでに固定し、それを別け隔てなく他の生命に手渡し、水と土を豊かにしてくれたからこそ今の私たちがいる。樹木が、樹齢数千年の、縄文杉のような古木であつたなら、環境を見守りながら、樹木は数千年にわたつて、もくもくとその利他的な営為を続けてくれていることになる。

自然の循環の核心をここまで過不足なく捉えた言葉を私は知らない。まだ光合成のしくみや代謝の生化学がほとんどわかっていなかった二八世紀に、生命の本質を的確に言い表したシラーの慧眼にただただ感服する。生命の本質とはつまり、生命が利己的ではなく、利他的である、ということだ。

生命はおおよそ三八億年前に発生した単一の起源から出発して、以降、発展と進化を遂げてきた。そのプロセスは、一見、闘争や競争の歴史に見える。利己的遺伝子、という言葉に代表されるように、遺伝子は自分の存続だけを唯一無二の目的にしてきたかのように見える。けれどもそれは正しくない。生命はたえず利他的な共生をめざしてきた。

千年を生きる樹

生物学者・青山学院大学教授
福岡伸一

鹿児島県屋久島の標高500メートルを超える山地に自生している、屋久杉。500年が寿命と言われるスギの中で、屋久杉は樹齢2,000年を超える巨木が存在する。中でも1966年に発見された最大の縄文杉は、樹齢7,200年という説もある。



たとえば、進化史上に、大きな飛躍が三度行われたことがある。一度目は、単純な一枚の膜に囲まれただけの原核細胞が、複雑な内部構造を持つ真核細胞になった。これは、小さな細胞が、大きな細胞に飲み込まれた時、小さな細胞を破壊せずに、細胞内に温存したことによって生じた。小さな細胞は、それぞれミトコンドリア、葉緑体などの細胞内小器官として、大きな細胞と共生することになった。二度目のジャンプは、単細胞が多細胞化したことである。このときも、各細胞が棲み分けを行うことによってそれぞれ専門機能を分担し、より大きなシステムを作ることに成功した。三度目の飛躍は、雌と雄が生まれて有性生殖を行うようになったことである。互いに他を必要とすることで、新しい変化を生み出したのである。

利他性とは、自己犠牲や強制的な寄付行為ではない。まず自らが得意分野の能力を伸ばして、ある種の過剰性を獲得することから始められる。つまり自己充足に必要な二〇が、二〇に、あるいは二二〇に高められる。このときの余剰である二〇もしくは二二〇が他者に手渡されること、これが利他性である。それゆえに、いのちは柔軟で、可変的で、レジリエントなものでありつづけてきた。現在、世界的に叫ばれているSDGsも、その基礎に利他性のメカニズムを持たなければ、実現することは困難である。人間は地球の支配者ではない。地球環境の一員であり、その保全における重要なプレイヤーである。ポストコロナの生命哲学として、この利他的共生の理念がますます重要なものとなるだろう。

福岡 伸一

生物学者・作家。1959年東京生まれ。京都大学卒および同大学院博士課程修了。ハーバード大学研修員、京都大学助教授などを経て、現在、青山学院大学教授・米国ロックフェラー大学客員研究者。87万部のロングセラーとなった『生物と無生物のあいだ』、『動的平衡』シリーズなど、“生命とは何か”を動的平衡論から問い直した著作を数多く発表。近著に、副交感神経優位の暮らし方をすすめる『迷走生活の方法』(文藝春秋)がある。

